

岩本誠吾 ほか著

二一世紀国際法の課題：安藤仁介先生古稀記念

有信堂高文社 2006



本書は、安藤仁介先生古稀記念論文集である。京都大学名誉教授の安藤先生は、世界人権問題研究センター長をはじめ IMF 行政裁判所裁判官、常設仲裁裁判所裁判官等を現在も務めておられる世界的に著名な国際法学者である。その先生から院生時代に直接指導を受けた者 15 名が、学恩に報いるべく、参集し、多岐にわたる国際法の分野にわたり分筆した大部の著書（507 頁）が、これである。本学法学部戸田五郎教授（国際法担当）も、その一人として、「非国家機関による迫害と難民の保護」と題する論考を掲載されている。

私は、記念論文集に名を連ねること自体はばかられるほど最も悪き弟子であったが、「ROE の国際法問題点とその存在意義」と題する論考を書かせていただいた。内容は、いわゆる戦争法に関するもので、国家が、最前線の軍隊構成員に戦場でどのように国際法を適用させるのか、という問題に焦点を当てている。現場の兵士は、様々な場面に遭遇した場合に、その場で国際法の本を読んでから、判断することができず、瞬時に判断（発砲するか否か）しなければならない。判断が遅ければ殺害される危険性があり、速ければ誤射の可能性も出てくる。その場合に、国家は、行動準則として兵士用に国際法を単純化した指令の ROE (Rules of Engagement) を出す。これは、「交戦規則」と訳される。

2000 年に公開された米国映画「英雄の条件(原題: Rules of Engagement)」が、ずばりそのものを取上げている。大使館員救出のために向かったチルダース大佐が海兵隊員に暴徒と化した民衆への銃撃を指示した。それが、民衆殺害の禁止という ROE に違反するか軍法会議で問われる。しかし、民衆の中に武装ゲリラがいたことにより、チルダース大佐の射撃指示は自衛のためで、軍紀違反に該当せず、無罪であるという結末であった。

翻って、日本にも、ROE が整備されているのだろうか。1954 年の自衛隊発足から 1991 年の湾岸戦争

掃海艇派遣まで、自衛隊は海外に出ず、ハード面の防衛力(軍事力)の整備に専念してきた。その反面、そのソフト面である運用(オペレーション)をなおざりにしてきたように思われる。有事法制が一応整備されたのも、2004 年である。これで十分だろうか？ いや、有事法制は運用のための国内法上の法的根拠であって、更に、それとは別に、国際法、国内法、国内政策、軍事作戦の要請に基づく具体的な行動準則が必要である。

1991 年以来、自衛隊は数多くの海外派遣(PKO、インド洋派遣、イラク派遣等)を経験し、昨年、それらを自衛隊法の本来任務と位置付けた。今まで自衛隊による海外での発砲事案はないが、これからはないとはいえない。むしろ、海外派遣が多様化・頻繁化すれば、その可能性が高まる。ROE の内容は、どの国でも極秘なので、窺い知れないが、ROE の存在自体は公になっている。日本では今までそのような議論すら存在せず、現場でどのように処理しているか不明である。

戦前の日本軍のような戦争犯罪を生まないように、日本の ROE 研究が重層的に進むための一つの問題提起になればと切に思い、この論考をまとめた次第である。

(いわもと せいご 法学部教員)



カット 久世 さとみ

(経済学部 2 年次生)



佐々木利廣編著

チャレンジ精神の源流：プロジェクトXの経営学

ミネルヴァ書房 2007



NHKの番組「プロジェクトX」をご存知ですか。2000年3月から2005年12月まで6年間続いた番組です。その間に190本程の「プロジェクトX」が放映されたので、ほとんどの学生は数本は見たことがあると思います。最近では中学や高校の社会科の授業や総合的な学習の時間でも使われていると聞きます。この「プロジェクトX」を使って授業ができないかというヒントが産大のキャリア形成支援科目「チャレンジ精神の源流」の開講につながりました。2003年4月のことです。

2004年から経営学部教員がこの科目の担当になり、経営学の視点から「プロジェクトX」を料理することになりました。それまでも授業の一部で「プロジェクトX」をケースに講義をしていた教員もいたようですが、チャレンジ精神の源流を担当しているなかで経営学の多様な視点から「プロジェクトX」という良質のケースを分析できないかという声が生まれてきました。本書はこうした問題意識から出てきた産物です。

構成としては、)製品をつくる、)市場を拓く、)組織を束ねる、の3部構成になっています。これは経営学の領域からいえば、それぞれ新製品開発、新市場開拓、組織マネジメントに相応します。第部の製品をつくるでは、開発系の「プロジェクトX」をケースに現場からの自律的で創発的な戦略行動が新製品や新技術の開発につながる過程を克明に分析しようとしています。辺境からの革新、闇研、社内ベンチャリングなどのことばを再検討しようという試みでもあります。

続いて開発が一企業内だけで行われるわけではなく、ライバル企業や部品企業などの外部組織の協力を得ながらダイナミックに進んでいく過程を分析しています。最後に新しい技術や製品の開発が企業間関係の変革を経て産業そのものの進化にまで及ぶ過程を分析しようとしています。このように第部を読むと、製品をつくるという行為が、企業内だけでなく企業間さらには業界や産業の発展にまでつながっていることが理解できると思います。扱っている

ケースは、ロボット、ワープロ、自動改札機、デジタルカメラ、プラズマテレビなど日々の生活に直結した商品の開発物語が中心です。

第部の市場を拓くでは、マーケティングや国際経営の視点から、新しい国内市場を開拓していく事例や日本発の製品を欧米の市場に浸透させていく事例を取り上げています。この分野に関して、カップヌードル、醤油、トランジスタラジオなど多くの身近な商品を取り上げています。製品と商品の違いやメイドインジャパンの商品を海外で定着させる方法などについて興味をもつ読者に読んでもらいたいと思います。

第部の組織を束ねるでは、組織をまとめることの難しさと重要性、「プロジェクトX」のリーダーたちの行動を中心にプロジェクトが成功するまでの軌跡を分析しようとしています。第部ではボランティア組織、地域再開発、社会貢献活動など非開発系の「プロジェクトX」も登場します。そして最終章の第8章は、NHKディレクターによる「プロジェクトX」という番組の製作ストーリーです。この章から「プロジェクトX」が多くの読者を獲得し社会現象になった理由の一端を垣間見ることができます。

いずれにしても本書は教員(佐々木利廣・久保亮一・具承恒・藤原雅俊・市川貢・植木真理子)と大学院生(東俊之)とNHKディレクター(山本隆之)の計8名による3年間の共同作業の産物です。まさに我々の「プロジェクトX」かもしれません。なおキャリア形成支援科目である「チャレンジ精神の源流」は来年度春学期も開講予定です。この授業を未受講で興味をもっている学生は、担当部署であるキャリア教育研究開発センターを訪ねてください。

(ささき としひろ 経営学部教員)



カッタ 脇 千裕

(理学部 3年次生)



生田眞人 ほか著

オーストリア形象と夢：帝国の崩壊と新生

平田達治, 金子元臣, 藤井ねり [ほか] 著

松本工房 2007



この本は「オーストリア研究会」という研究会での主な成果を、研究仲間の三名が編者となり著者ともなって、まとめたものです。二ヶ月に一回程度、会員が二名づつ口頭発表を行いその内容につき、その都度参加者全員が共同討議・検討するということを、およそ十年間続けてきました。そして、その成果の一部を一冊の本の形でまとめたわけです。したがって、今回活字として収録できなかった発表も多数に上りましたが、十一篇の文化論・芸術論を何とか本書に載せることができました。

研究会での成果のまとめですから、編者としては、なるべく多方面にわたる文化・芸術の問題を扱っている論文を集めるよう工夫しました。とはいうものの、あまりに研究対象が拡がりすぎると、読者のほうは一体何を問題にしている論文なのか、ということが判りにくくなりますので、大きな総合テーマとしては「第一次世界大戦と第二次世界大戦の間のウィーン文化」に限定してあります。

ウィーンを首都とするオーストリアは歴史的に見て、ドイツと一緒にあって最初の世界大戦を惹き起こし、結果としてドイツ同様、皇帝がいなくなって共和制になり、次の世界大戦にはヒトラーのナチス・ドイツに併合されて加わっていったわけですから、いわゆる「両大戦間のウィーン文化」というものは当然シリアスな問題を抱えていて、従来あまり検討されてこなかったという事情があります。もっとも、やっと近年になってこの時代の歴史を研究するところから始まって、文化の問題に至るまで、この時代はある程度クローズアップされるようになりましたが、この本に収められた論文は、研究上未開拓の分野に分け入っており、日本で殆ど知られていない、あるいは紹介されてこなかった作家や文化の問題が取り上げられています。ヨーロッパや日本で知られている作家や芸術家、あるいは哲学者を扱う場合でも、時代との関連上新しい視点で論じているものが多いと思います。

二十一世紀の初めという新しい「世紀転換期」から見て、同じドイツ語圏でもベルリンを中心とする

現在のドイツとウィーン中心のオーストリアを較べると、その経済力や政治の影響力の差は歴然としています。しかし第一次世界大戦勃発までは両方の国は同じ専制帝国であり、その時点では国力は色々な側面で衰えていたとはいっても、オーストリアのほうははるかに長く続いて、強大でより広大なハプスブルク帝国、オーストリア＝ハンガリー二重君主国という過去を持っていました。両大戦間の少し前のウィーン文化も「世紀末」の、あるいは「世紀転換期」の文化として、他の欧米諸国から注目され、高い評価を受けていました。ところがその直後の「両大戦間期」の文化としては、ベルリンのほうはいわゆる「ワイマール文化」のメッカとして有名になり、ウィーンのほうはあまり注目されなかったわけです。したがって本書の刊行はこのひずみをなくし、この動乱期のウィーン文化を肯定面、否定面の両方から批判的に捉えなおし、新しいウィーン(文化)像を打ち出すことも目的としています。

十一篇のエッセーや論文はさまざまなスタイルと内容を持ち、当時の社会や政治、そして文化の状況を描いています。さらには動乱の時代にあって、個々人の生き方はどうあるべきなのかという本来の文学のテーマを追求しているものもあります。

(いくた まさと 外国語学部教員)



カット 久世 さとみ
(経済学部 2年次生)



中良子 [ほか]執筆
神話のスパイラル：アメリカ文学と銃
花岡秀 編著



英宝社 2007

今年4月にヴァージニア工科大学で起きた銃乱射事件は、「銃を持つ民主主義国家」アメリカの抱える問題の複雑さについて改めて考えさせるものだった。武器を所有する権利と銃規制の論議に決着をつけることは不可能にも思われる。銃の問題を政治的・社会的側面のみから捉えることには限界があるのではないだろうか。表象としての銃を読み解くことが、アメリカ銃文化の本質に迫る有効な手段となるのではないだろうか。

銃は、西部劇をはじめとする映像メディアなど、多様なテキストのなかに描かれてきた。しかしその表象性に着目して論じた研究書は意外に少ない。本書は銃社会アメリカの現実を見据えつつ、アメリカ文学に描き込まれた銃の象徴的意味を探ることで、銃が、「アメリカ神話」を巻き込みながら、重層的な象徴性を帯び、変容を繰り返してきたアメリカそのものの姿と重なり合うことを明らかにしようとしたものである。

アメリカ銃社会の形成には、新大陸の征服以来、パイオニア精神という理念まで作りあげた領土拡張主義や、銃の所持率を飛躍的に高めることになった南北戦争に象徴される人種間の緊張関係から紡ぎ出されたさまざまな神話が関与してきた。さらにケネディ大統領の暗殺など、銃にまつわる事件が神話化され、それがメディアによって時空を超え再現されることで新たな神話が生み出されている。第一章「南部スモール・タウンと銃 神話の創造と崩壊」第二章「公民権運動ナラティブにおける銃」第三章「帝国支配の記号学 舞台の上の銃と他者」第四章「女たちの一撃」第五章「蘇る標的 デリー口文学の弾道」からなる本書は、アメリカ社会の形成に深く関わる銃が、人種やジェンダーや歴史の境界を越えて発射される時、銃身の内部に刻まれたライフル螺旋によって回転を与えられ空間を移動する弾丸の射程に、さまざまなアメリカ神話を巻き込む混沌としたスパイラルが生じることを解き明かし、神話の読み直しと書き換えを試みる文学的想像力の可能性を論じている。

私が担当した第二章においては、公民権運動時代、アメリカ全土を揺るがした衝撃的な二つの事件、エメット・ティル少年リンチ殺害事件とメドガー・エヴァーズ暗殺事件を取り上げ、それぞれの事件を題材にして書かれた黒人作家ジェームズ・ボールドウィンの戯曲と白人作家ユードラ・ウェルティの短編に描かれた銃表象を考察した。作品には、社会変革の象徴としての「発射されない銃」と南部の土地から発射された実体のない「銃声」が描かれる。銃を鍵に南部神話のねじれと崩壊を描く物語は、その後の南部社会の変貌を予言する。銃に取り憑かれたアメリカの想像力が生み出す文学と現実が連動して、銃社会アメリカの物語が生み出されていく過程を解明した。

今、巨大な銃と化したアメリカの標的は何か。その射程でアメリカの神話がいかに書き直されていくかに注目することが重要であろう。

本書は、2004年日本アメリカ文学学会全国大会のフォーラムにおいて講師を務めた5人が、文部科学省から研究助成金を受託して研究を続けた成果報告でもある。深刻なテーマを扱いながらも、共同研究の楽しさを味わうことができた貴重な一冊となった。

(なか りょうこ 文化学部教員)



カット 久世 さとみ
(経済学部 2年次生)